新世代の医療秘書

病院スタッフの未来へ！

医療秘書科50周年 50th Anniversary

— 思いやりが結ぶ未来へ —

日本で最初の医療秘書科は、2022 年に開設 50 周年を迎えました。これを記念して 8 月 2 日に記念式典を開催。河北博文氏（社会医療法人河北医療財団理事長）を講師にお迎えした記念講演「日本におけるプライマリ・ケアと病院医療――病院ってかっこいい！」では、病院の未来、病院スタッフの未来についてお話しいただきました。

日本における プライマリ・ケアと 病院医療

―病院ってかっこいい！―

社会医療法人河北医療財団 理事長
河北博文氏

若い人たちが幸せに生きられる世の中に ――地に足をつけて幸せな人生を

今、この日本はどのような社会になっているのでしょうか。そして若い人たちは、本当にこれから幸せな人生を送っていくことができるのでしょうか。我々は今、生きています。生きているということは自分探しの旅を続けることです。自分探しの旅とは、「自分はどのような人間だろう」「これからどのような人間になっていくのだろう」「どのような人になりたいのだろう」と考えることです。そして私は若い人たちにはやはり、これからしっかりと幸せな人生を送ってほしいと思うのです。

皆さんも教育に携わる中で実感されていると思いますが、知識と知恵は違います。知識というのは覚えるもの、記憶するものですが、それは使うためです。知識を覚えるということと、それを使う知恵を育てるということが大切なのです。

今、医療従事者は、介護を含めて全国で約 800 万人いるといわれています。社会では円安や物価高が進み、賃金をどうするかという話になっていますが、賃金といっても、病院は公定料金です。その中で賃金を上げるのは大変なことです。公務員であれば国家公務員の給与体系があり、それを変えなければ給料を上げることはできません。公定料金で働く人や公務員は、6500 万人の総労働人口の中で 2000 万人近くおり、その中の一番の大きな分野というのが医療なのです。しかもこの数年は、海外から働き手が入ってこなくなり、円安も進んでいます。アジアの人々がヨーロッパに流れている。そのような状況で、この国では若い人たちが医療に従事していかなければいけない。そのためには、若い人たちが喜んで入ってくれるような環境づくりをしなければなりません。

ではどうするか。一人一人が考える力を持つことがとても大切です。福沢諭吉は「学んだならばそれを必ず行動に移さなければ価値がない」と言いましたが、学んだものをそのまま行動に移したのでは人の真似になる可能性がありますから、自分の考えを間に挟んで「学び、考え、行う」ことが必要になってくるでしょう。考える力を育てる教育を私も続けていきたいし、皆さんにもぜひそれを考えてみていただきたいと思います。

これから医療で起こること ――プライマリ・ケアと医療事務職人材の強化

これから医療では何が起こるか。何が求められるか。

一つは、プライマリ・ケアの見直しです。プライマリ・ケアは「一次医療」あるいは「生活医療」、もしくは保健所が使うように「生活保健医療」と訳せるでしょう。身近にある医療ということです。代表例はイギリスにおける National Health Service（NHS）という仕組みです。日本の医療はいろい

ろな専門家に散らばってしまっていますが、それをもう一度プライマリ・ケアとして集め直すことで、生活医療の作り直しが始まるでしょう。

そしてもう一つは、医療事務職人材の強化です。我が国には、全国に8300の病院があります。その中で、日本医療機能評価機構の審査を受けて認定に至る可能性があるのはせいぜい3300病院であり、5000病院は審査すら受けられない病院です。プライマリ・ケアと日本医療機能評価機構が認定した病院をつないでいく仕組みをこれから考えていかなければなりません。これは、医師や専門職種の人にはできないことです。さまざまな部門のリーダーやマネージャーがいなければいけない。それをつないでいくのは事務部門で医師を支える人たちです。医師と専門職種を、あるいは社会と医師を、社会と医療機関をつなぐ。そのためには事務部門の人々が動くことが必要だろうと思います。すべきことは多々あり、事務部門の人々は必要不可欠です。そのためにも、その仕事を選んで幸せだと思えるような環境づくりをしなければいけないと思います。

さらにもう一つ、電子カルテ情報の一元管理も今後一層求められることになります。これは業務改善のDXの話ではなく、電子カルテの中身の分析をするということです。イギリスのNHSでは6000万人を150の地域に分けて管理しています。一つの地域は概ね40万人ほどですが、それに対して約40箇所の診療所を開設します。診療所を運営するのは民間ですが国が無料で電子カルテの機器を設置し、入力された情報は全て国が収集・分析するのです。日本でもこのようにプライマリ・ケアからセカンダリー・ケア（二次医療）、ターシャリー・ケア（三次医療）へとつなげていく仕組みが必要だと考えています。

五感を働かせ、「考える」力を持つ輝く人を育ててほしい

最後に二つお話しします。

一つは「受容」と「傾聴」そして「共感」の大切さです。受容とは、心を開いてあるがまま受け止めることと私は定義しています。傾聴とは、単に耳を傾けるだけではなく心を込めて最後まで話を聞くこと。共感とは、心を共にして寄り添っていくことです。これは医療だけの問題ではなく、我々の生活の中でとても大切です。しかしこれを行うのはとても難しい。教育の中でも、とても大切なことだろうと思います。

そして、やはり我が国にある「一番大切な宝」は、“人”だということです。私は、人に輝いてほしいと願っています。そのためには外から磨かれるだけでなく、五感を働かせ、自分自身が内面から変化していくことが求められるでしょう。

ぜひ皆さんにも、教育の中で、若い人たちとの対話の中で、こういったことを感じられる、考えられる若い人たちを育てていただきたい。期待しています。

ご支援への感謝を込めて、医療秘書科 50 周年記念式典開催

2022 年 8 月 2 日（火）、本校 7 階に新設した病院受付実習室にて、「早稲田速記医療福祉専門学校医療秘書科 50 周年記念式典」を挙行しました。式典には高等学校や医療機関などから関係者約 30 人が出席。川口拓也理事長、橋本正樹校長がこれまでのご支援への謝意を表し、校友会の野間弘会長から祝辞が述べられました。河北博文氏（社会医療法人河北医療財団理事長）による記念講演の後には、医療秘書科の村山由美学科長が教育の内容を紹介しました。

医療現場を支える人材育成に力を尽くす

学校法人川口学園
理事長 川口拓也

医療秘書科の歴史においてはさまざまな出会いがありました。開設にあたっては、塩月正雄先生から「医療秘書」という存在をご案内いただき、一緒にカリキュラムをつくっていくことになりました。当初の医療秘書科では、文字どおり病院の幹部層の秘書を養成していましたが、時代の流れとともに、診療報酬請求を担う医事課職員や病棟の事務を担う病棟クラーク、診療録管理士（現在の診療情報管理士）、昨今では医師の働き方改革を担う医師事務作業補助者など、求められる職種は常に変化してきました。それに合わせて、本校でも医療機関の事務職全てをカバーするスタッフ育成を目指してきたわけです。

他にも多くの先生方にお世話になりました。お二人、名前を挙げさせていただきたいと思います。お一方は長年にわたり学科長を担われた生方教允先生です。さまざまな医療機関とコネクションを作り、病院事務実習等の現在の礎を築いていただきました。もうお一方は栗田静枝先生です。栗田先生は戦後、氷川丸でアメリカに単身留学して診療録管理を学び、帰国後は多くの病院で診療録管理の整備普及に尽力され、1966 年には、「メディカルレコードライブラリアン」の資格を取得。本校では 1976 年の診療録管理の教育開始以来、熱心に教育にあたっていただき、多くの先生方や病院を紹介していただきました。

現在、日本の医療は少子高齢化の中で大変な状況を迎えている一方で、AI などテクノロジーの進展もあります。「将来なくなる仕事」として学校事務と医療事務が並んでいるのを見ることがありますが、教員だけで学校運営はできないように、ドクターやナースといった専門職だけで病院が運営できるのか、私は大いに疑問を持っています。

医療秘書科の学生全員が受ける検定に、一般社団法人医療秘書教育全国協議会が実施する医療秘書技能検定があります。同協会の元会長であった日野原重明先生が医療秘書についてお書きになった一節を紹介します。

「医療秘書は、多忙な医療従事者を補佐し、医師や看護師などの専門職と共通の用語と共通のバックグラウンドを理解し、苦しみや不安な患者にホスピタリティを提供する、医療現場を支える重要な人材だ」。

非常に心強い言葉です。専門学校は資格だけが全てではありません。や

はり“人”を育てる場所です。我々は単なる事務職でも秘書でもなく、「医療現場を支える人材」として医療秘書教育を行っていきます。この 50 年間、お支えいただいたことに改めて御礼申し上げるとともに、今後も日本の医療を支える人材の育成に力を尽くすことをお誓い申し上げます。そして今後とも相変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

変化に対応できる人材育成目指す

早稲田速記医療福祉専門学校
校長 橋本正樹

本校は 1972 年に医療と福祉の分野での職業人教育の第一歩として日本初の医療秘書科を開設しました。以来、医療福祉分野の各学科において有為の職業人材を養成してきました。

本校の教育の伝統は、変化を恐れることなくむしろ好機と捉えることによってその時々の環境に対応し、培われてきたものと理解しています。今年、本学科は共立美容外科と相互協力・連携に関する協定を結び、新たに「美容医療コース」を設けました。今、美容医療は若者世代の注目を集めています。この時代の価値観に沿って評価するならば、美容医療は人々に前を向いて生きる勇気を与えることができる、患者本位の自発的な新しい医療の形を示しているといえるのではないでしょうか。

本校の医療秘書科は、もともと「秘書科」の 1 コースとして開設したものであり、当初は病院管理職の秘書の育成を目的としていました。1980 年頃には、現場での事務業務に特化した教育を行うことになり、医療秘書専攻や医療事務専攻、診療録管理専攻、病棟クラーク専攻などの専門コースを増やしていきました。想定する業務は診療報酬請求などの医療における事務が中心になり、その過程で、「医療秘書」と「医療事務」は混同されるようになっていったのです。そして現場では、2010 年頃にカルテの代行入力や書類作成など医師の事務作業をサポートする新たな職種として「医師事務作業補助者」が生まれ、その需要は高まり続けています。

今後の医療の現場では、医師の働き方改革や医療の高度化、地域包括医療の拡大が加速していきます。それに対応するため、これまで人間が行ってきた作業が AI などのテクノロジーで置き換えられていく“テック化”はますます進むでしょう。しかし、医事課をはじめとする病院スタッフの必要がなくなるわけではありません。むしろ、専門職である医師や看護師、各分野の技師にそれぞれの業務に専念してもらうため、全体のマネジメントやアドミニストレーションを行う新たな役割を持つ、優秀な病院スタッフが求められることになります。今後求められるのは、専門職と同じ用語を理解し、診療報酬の仕組みや医療法規を理解した上で、コミュニケーションスキルと IT スキルを駆使して専門職をサポートする病院スタッフなのです。開設から 50 年の時を経て、本来の意味での「医療秘書」の幕開けがやってきたのではないかと我々は考えています。

本校の医療秘書科はこれからも「思いやりをかたちに」を合言葉に、医療に寄与する質の高いパラメディカルの人材を育成してまいります。

医療秘書科 50 周年に寄せて

学校法人川口学園
学園長 川口晃玉

音声を文字情報として記録する「速記」教育から始まった本校では、医療に関するさまざまな情報を記録し管理する職責があるとして、「医療秘書」教育を行ってきました。時代の変化とともに、それらの記録はアナログからデジタルに形式を変え、現在では、記録された情報をさまざまな形で活用することまでもが、医療秘書の役割として求められるようになっております。

そのためには、さまざまな情報機器やツールを使いこなす IT スキルも必要です。一方で、現代の若者の多くは、対面でのコミュニケーションを苦手としているようです。病院の現場では、患者だけでなく院内の各部門、院外の多岐にわたる関係者と対話し、円滑なコミュニケーションを図っていかなければなりません。

本校で大切にしてきた、正確で適切な「情報の記録」は、今後も求められるスキルです。それに加え IT スキルとコミュニケーションスキルの伸長を図り、今後も現場で活躍できる病院スタッフの育成に努めてまいります。

これからの教育にも期待と支援を

早稲田速記医療福祉専門学校校友会 会長
野間弘氏

本校の医療秘書科にはさまざまな方が教員として在籍していました。元慶応義塾大学教授の藤川正信先生は、医療秘書教育計画の立案に携わってくださいました。東京大学医学部卒で元都立病院院長の室賀不二男先生は医療秘書教育メンバーの中枢であり、外部への告知では大変ご尽力いただきました。錚々たるメンバーが教員として集まっていたのです。

本校が 1972 年に学校教育として日本初となる医療秘書科を開設する 7 年前に、鹿児島県医師会が医療秘書の養成を始めており、多数の志願者が集まったようです。本校でも学科開設から 10 年もたつと、「医療秘書」は人気の分野になりました。在籍数が 700 人ほどになったこともあり、医療系難関校として入学さえ難しい時代もありました。

その後は紆余曲折の道のりではありましたが、それでも 50 年、医療秘書科は頑張ってきました。私は校友会の立場から、これからも医療秘書科を支えていこうと思っています。

SOKKI
［高等教育修学支援新制度対象校］
学校法人 川口学園
厚生労働大臣指定・看護師養成所／厚生労働大臣指定・介護福祉士養成校／
日本病院会認定・診療情報管理士認定試験受験指定校
早稲田速記医療福祉専門学校
https://www.wasedasokki.jp/
〒171-8543 東京都豊島区高田 3-11-17
TEL：03-3208-8461（学校代表）